

# Rookies Festival

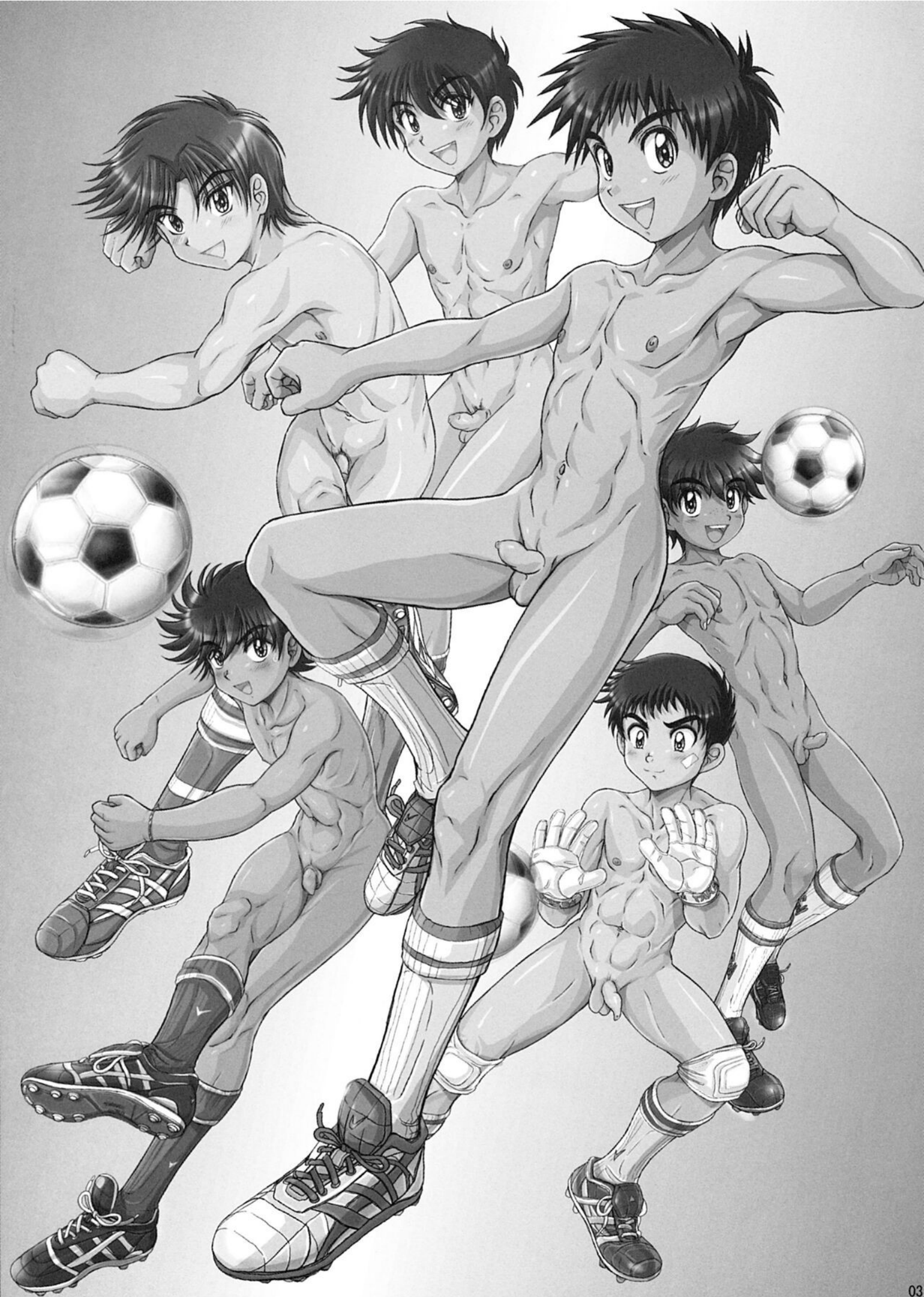
## 補完計画

Rookies Festival Revenge

成人向  
FOR ADULT ONLY







『サッカーU・15の春の新人戦トーナメントとして企画され、この春の新人部員のみで構成されたチームで競い合った「第一回 箭カップトーナメント」ルーキーズ・フェスティバル』（以下、箭カップ）は、ノーシードの新興チームが優勝するという劇的な幕切れとなり、前回詳しくご紹介した、シードチームによるエキシビジョンマッチのアトラクションも含め、大盛況のうちに終了しました。

しかし、この『箭カップ』には、ある重大な秘密が隠されていたのです。その情報を掴んだ本誌は、主催者に直撃し、特別に許可を受けて『真のルーキーズ・フェスティバル』の取材することができましたので、ここに報告します。

### 会員限定の秘密ライブに潜入！

決勝戦から一週間後の都内某所。

ありふれたオフィスビルの地下一階にある、どこにでもありそうな、小さな喫茶店の扉には、『本日休業』の札が掛かっていた。時間は午後6時。主催者側から、あらかじめ指示されていたとおりに、営業していない喫茶店の扉を押し開けて中に入ると、体格からすると高校生だろう、背が高く、肩幅のがっちりした学ラン姿の少年3人が

こちらを振り向いた。

「申し訳ありません、本日はお休みとさせていたいただきます」

その中の一人が、そう言いながら、爽やかな笑顔で頭を下げる。

そして、気がつけば、体格の良い男子高校生三人にさりげなくとり囲まれていた。

しかし、こちらにも、はいそうですか、と引き返すわけにはいかないのだ。主催者側から渡された『特別会員証』とチケットを取り出して、三人に見せる。

「…お待ちしました。こちらへどうぞ」

三人は会員証を確認すると、笑顔でカウンターの奥の扉へ案内してくれた。

## 神原郁海

箭ライスFC



## 谷島慶太

Seagull SC



## 一條雅樹

高学園サッカー部





## 鷺野遼平

生春学園サッカー部



## 瀬家刹那

Takeyabu Being FC

## 下郷猛樹

FC Bamboo G



カウンター奥の扉を入ると、さらに奥に不自然な鉄製の扉があった。

「その扉の向こうに、あらためて受付がありますので…」

男子高校生に促されてその扉を開けると、そこは六畳ほどの小部屋で、まるでホテルのフロントのような空間だった。

「いらっしやいませ!」

ただし、フロントの中にいるのは、やはり学ラン姿の男子高校生だ。

受付を済ませて、今度こそようやく、目的の場所にたどり着くことができた。

フロントの隣にある、大きな扉に掲げられた小さくシンプルなプレートには、たっ

た一文字『箭』とだけ書かれている。

ここは、この春オープンした箭アーツ直営の会員制クラブで、普段は、表の喫茶店が閉店したあとの夜九時から営業していて、様々な年代の男の子が、いろいろなコトをして見せてくれる、らしい。

今日は、毎週土曜日に開催されているハイドSMデーの、さらに特別版なのだ。

「実は、こっちが本当の『ルーキーズ・フエスティバル』なんです。サッカー大会の『箭カップ』は、その出演者を調達するための仕掛だったんです」

そう語ってくれたのは、主催者で箭アーツ代表の石河氏だ。

「開店記念の特別企画として、こういうアールバイトは絶対しないような、極上のスポーツ少年を公開処刑したかったんです。そこで、詳しくは言えませんが、箭カップの各参加チームと事前に秘密契約を結んでいまして、結果的に、シードチーム5つと優勝したチームの中心選手、計六人を『レנטアル』してもらえたんです。昨今の経済情勢からか、各チームとも積極的でしたよ」

こうして、各チームのエース級の少年六人が、チームの経済的な事情のために、今日から毎週一人づつ、この秘密クラブで性的に公開処刑されることになったのだ。

思ったよりも広いな、というのが店内に入った最初の印象だった。

オフィスビルの地下にしては天井も高く、広さはバスケのコートくらいはありそうだ。その中央に、四畳ほどの広さで、一メートルくらいの高さの四角いステージがある。

普段は、そのステージの周りを客席のテーブルが囲んでいるのだろうが、今日はすべて片付けられ、オールスタンディングになっていた。そして既にそのステージを中心に大勢の客がフロアを埋めている。

収容能力の都合から、予約限定で各日定員二百人だそうだが、明らかにそれ以上の人数がいるように思われる。まあ、自分自身もその定員外の人間なので、そこは追求しないでおこうと思う。

壁面に複数設置されている超大型の薄型テレビでは、先週の筒カップで披露された、シードチームによるアトラクションの様子が放映されている。

今日『公開処刑』されるのは、そのアトラクションでも大活躍した少年で、その彼を中心に編集した映像のようだ。

開演は午後七時からなので、他の客と同じように、ドリンクを貰って、受付で渡されたパンフレットやフライヤーを読む。

ここまでは、会場全体の雰囲気も含めて、まるで普通のライブハウスの開演前のよう

だったが、そのパンフレットやフライヤーの内容はかなり過激だ。

そして、もう一つのライブハウスとの大きな違いは、カメラ類の持ち込みが自由という事だ。他の客達は、たいてい何がしかのカメラを持っている。

突然、照明が落ちて会場がざわめく。

つい夢中でフライヤーを読みふけていたが、もう開演時間になったようだ。

ベルの音が続いて、若い男の声で正式に開演が告げられる。

『本日は、少年倶楽部「筒」のスペシャルプログラム、「ルーキーズ・フェスティバル第一夜」へお越しいただきまして、まことにありがとうございます。すでにご案内させていただきましたとおり、本日から六週にわたって、通常はなかなか調達できない、レアな少年達を、皆様のために公開処刑させていただきます。本日も用意しました少年は、筒カップで準優勝した生春学園サッカー部のエースストライカー、鷲野遼平選手です！』

次の瞬間、ステージ全体がライトアップされて、そのステージ上に、黄色を基調としたユニフォームのサッカー少年が、サッカーボールを持って駆け上がってきた。

間違いなく、あの、鷲野遼平だ。

会場全体が、一気にワツと盛り上がる。

ステージ上の鷲野君は、明らかに緊張気味だ。普段、大観衆の前でプレーしている彼も、こういう特殊な空間では勝手が違いくすぎるのだろう。

ライトアップが切り替わり、スポットライトが鷲野君だけを照らし出す。

良く見ると、鷲野君が立っているのは丸いターンテーブルの上で、そのテーブルがゆっくりと回転しはじめていた。

『それでは、処刑を開始します』アナウンスの声に、会場が静まり返る。

『脱いで、全てを見せなさい』

打って変わった冷酷な声音で、スピーカーから命令が下される。

「……」

鷲野君は一瞬だけ躊躇うと、シューズを脱ぎ、そのまま一気にユニフォームのパンツと下着を立て続いて脱ぎ捨て、いきなり包茎チンポを晒した。

その瞬間、観客から大きな歓声が沸きあがり、大量のフラッシュが乱射される。

その観客の反応に驚いたのか、平静を装っていた鷲野君の表情が、急速に羞恥と困惑に染まっていく。攻撃的なチームカラーを体現する勇敢で強気な彼も、この状況はさすがに耐え難いようだった。



正直なところ、幸運を喜ぶよりも、これは大変なことになったぞ、と焦る気持ちのほうが強かった。

ついさっきまで見上げていたステージの上で自分がいる。

そして目の前に、そう文字通り、手を伸ばせば触れられる距離に、筒カップで準優勝した生春学園サッカー部のエースストライカー鷺野遼平が、全裸で、チンポを完全勃起させて、膝立ちしているのだ。

鷺野君への『罰ゲーム』の執行人として、三人の観客が、受付番号で抽選を行って選ばれたのだが、まんまと当たってしまった。あくまで取材のためのゲスト扱いのはずなので遠慮しようかとも思ったが、その場の雰囲気と個人的な欲から、ついステージに上がってしまったのだ。

スポットライトに照らされた、全裸の肉体は、『まるで芸術品』という陳腐な言葉が、浮かぶほど、素晴らしかった。

けっしてマツチョでは無いが、鍛え抜かれてまったく無駄が無い、きれいな形の全身の筋肉と、若々しく健康的なすべすべの肌、そして、無毛で包茎ながら、体格を考へれば、十分立派なサイズのペニスと睾丸。先週のアトラクションの際に、フィード上で全裸になった彼も見ているが、やは

り体温を感じられる距離で見るとでは、その魅力は比べ物にならない。

その彼が、全裸で皮の首輪を着けられ、両足は皮の拘束具でステージに繋がれていて、さらに皮の拘束具を着けられた両手は頭の後ろで組まされている。加えてアナルに挿入されたパイプで強制勃起させられた包茎ペニスからは、透明な粘液が漏れ出ていて、ライトに照らされて光っていた。

そして、なんと、その勃起させたペニスの根元と淫囊の根元を、繋がった皮のリングで戒められて、さらにそのリングに革紐でサッカーボールが繋がれているのだ。

つまり、このサッカーボールを蹴ると、同時に鷺野君のペニスと睾丸もボールと一緒に跳ね飛ばす、という趣向で、ステージに上げられた自分を含む観客三人は、幸運にもそのボールを蹴る役割を仰せつかったというわけだった。

しかも、自分が最初の一人として、選ばれてしまったのだ！

『お待ちせしました！準備が整いましたので、お仕置きを始めます。さきほど、全裸になって本人が懺悔したとおり、この鷺野遼平選手は、「筒カップ終了後から本日までの一週間、一切の射精を禁止する」という契約に違反して三回も射精してしまいまし

た。たとえそれが、チームの先輩に無理矢理しゃぶられての強制射精や、夢精によるもの等だとしても、けっして許されません。そのため、これからその身をもって償ってもらいます。まずは、だらしなく射精したチンポに罰を与えます！』

姿を見せない司会者の声にあわせ、ステージ脇のスタッフが合図を送ってきた。『行け！』の指令だ。

他の観客全員の視線が一気に自分に集まり、その痛さに全身から嫌な汗がでた。

「……っ！」

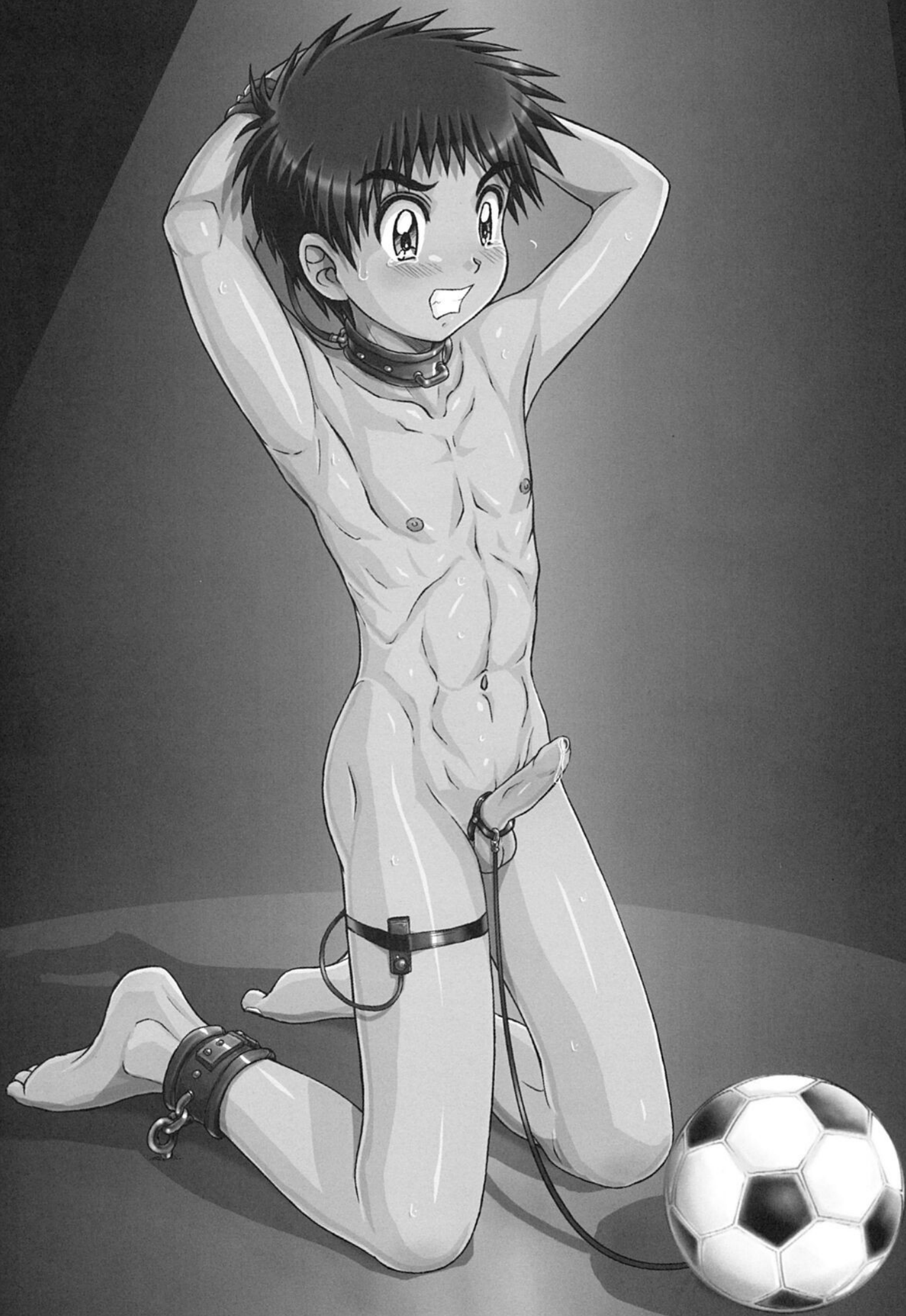
処刑される鷺野君自身にもその合図は見えていて、生唾を飲み込んで、ぐつと歯を食いしばった。すでに目にはうっすらと涙が浮かんでいるが、むしろこんな過酷な状況にもかかわらず、泣き叫んで逃げ出さなただけでも立派だろう。

『一発目っ！どうぞっ！』

焦れた司会者の催促に突き動かされて、反射的に、思っていたよりもかなり強めにボールを蹴り上げてしまった！

「っんぐああっ！」

瞬間的に、ペニスと陰囊がボールと同じ方向に引き飛ばされて睾丸が縊りだされ、悲痛な絶叫が会場に響き渡った。



三人の観客による、鷺野遼平に対する性器拷問は、想像以上の盛り上がりを見せた。ボールを蹴る力加減は様々だったが、鷺野君が苦痛に悶絶する程度には蹴りこまれ、さらに、全身に脂汗をかいて泣き叫びながらも、健気にチンポを差し出し続ける鷺野君の姿に、会場は異様なテンションに包まれたのだ。

そして、一番大きかった三人目のシュートが決まったあとに倒れた彼を、黒づくめの男たちが『ケアと次の準備のため』と称してステージから下ろすと、間髪いれずに再びステージ全体がライトアップされて、軽快な音楽とともに、全裸にビブスとシューズ、ソックス以外は身につけていない半裸のサッカー少年達が総勢二十人、ステージに駆け上がった。

チンポ丸出しの少年達は、先週の箭カッブのアトラクションの幕間で、同じ格好でコミカルなダンスを披露してくれた少年達と同じ男の子達のように、前回の記事で紹介した青河ユウ君の姿も見える。

少年達は、今回はさらに大胆に、チンポを勃起させながら踊って見せてくれた。

こうした、箭カッブでベンチ入りできなかったルーキー達による幕間の余興が終わると、再びステージの明かりが落とされ、会場全体が暗闇に包まれる。

自分も含めて観客達は皆、会場中央の真つ暗なステージの上に注目して、そこに現れるであろう鷺野君を待ち構えていた。

しかし、程なく歓声が沸き起こったのは、会場の一番奥にある、いかにも臨時にシートで覆われていた場所付近だった。

てつきり、ステージ用の機材スペースだと思っていたのだが、いま、その上空で、全裸で大きく足を開かされた鷺野君が、宙吊りになってスポットライトを浴びていた。

『おまたせしました。引き続きまして、健康診断を行います。先ほどは、男の子の大事などころをちよつとキツくお仕置きしましたので、念のため、ちゃんと使い物になるか確認します』

良く見ると、アナルにはバイブが挿入されていて、強制勃起させられたペニスと両方の乳首にはローターが着けられていた。

痛めつけた金玉が使い物になるか、射精させて確かめる、という趣向なのだろう。

『失礼かと存じますが、これから皆さんの頭上を、このまま股間を晒して通過させますので、皆さんにも良く見て確認していただきますようお願いします』

司会者がそう言うのと同時に、鎖で宙吊りにされた鷺野君が、ゆっくりと動き出す。そしてそのまま、ステージを中心にして

円を描くように、観客の頭上を進み始めた。

『なお、あくまでステージ上で射精するようには命令してありますが、途中で粗相をする可能性も十分あります。その場合は、受付でお渡しした、ビニールシートで対処願います』

そういえば、そんな物も渡されていた。『また、アナルに挿入してある特製バイブが抜け落ちないように、ぜひ、押し込んでやってください』

司会者の言葉に、すぐに観客の手が伸びて、鷺野君のアナルに挿入されているバイブを掴む。もちろん、ただ押し込むのではなく、しっかりと握って、グリグリと鷺野君のアナルを騷りまくった。

「…っんああんっ」

情け容赦ない行為に、鷺野君は悲鳴を上げるが、無論、運営側からの静止は無い。

観客達の行為はエスカレートし、すぐにアナルだけでなく、金玉やペニスも触られ放題になり、鷺野君を追い詰めていく。

やがて、私のすぐ真上にも来た。

それまで見落としていた、ペニスに貼られた絆創膏に気が付いて、ついその絆創膏に手を伸ばして触れた瞬間、

「っ、もう、駄目っ！出るっ！」

搾り出すような悲鳴とともに、鷺野君はとても勢い良く射精した。



鷺野君はその後も延々と、無防備に股間を晒しながら観客の頭上を通らされ続け、結局、ぐるりと会場を二週半する間に、合計四回も射精してしまっていた。当然、それを理由にした『お仕置き』が用意されているのだろう。

そして、その『お仕置き』のためだろうか、鷺野君が観客の頭上を三周してから、ようやくステージに向かって針路変更したところで新たな登場人物が明らかになった。二つのスポットライトがステージ上を照らしだして、そこについての間に二人の男が立っていたのだ。

私は彼らに見覚えがあった。今日ここに来る際、閉店している喫茶店の扉を開けたときに迎えてくれた、体格の良い男子高校生三人のうちの二人だ。

その彼らが、全裸で、しかもペニスを完全勃起させて、鷺野君を待ち構えている。露になったその肉体は、想像通り、いや想像以上に鍛え抜かれた見事な筋肉で覆われ、間違いなく格闘技系の肉体だった。

やはり彼らは用心棒だったのだ。そして、いまは、鷺野君の処刑人として、こちらも見事としか言いようの無い、かなりの巨根を見せつけながら、ステージに上がっているというわけだ。

『ご協力ありがとうございます。また、

なんと四回も、皆さんの頭上に射精してしましまして、申し訳ございませんでした。もちろん、この罪は後ほどその肉体で償わせますのでご容赦ください』

司会者の言い方だと、どうやら、これからステージ上で行われる事とは別に、さらにお仕置きがあるようだが……

宙吊りにされた鷺野君が、ステージに到着すると、全裸の男子高校生二人は手際よく鷺野君を鎖から下ろして、バイブやローターを外し、再び後ろ手で拘束して鎖に繋ぎ、鷺野君をステージ上のターンテーブルに置かれたお立ち台に立たせた。

『この鷺野遼平選手ですが、実は、生春学園サッカー部のアイドル選手でありながら、まだバックバージンであることが確認されております』

司会者の説明に会場がわっと沸きあがる。もちろん、その後を期待してだ。

『チームメイトとのふざけあいの中で、包茎チンポは既にチームメイト全員に玩具にされており、またアナルへの異物挿入も一度や二度では無いようですが、本物の男根を挿入されてのアナルセックスは未経験です。そこで、その鷺野遼平選手のバックバージンをチームから買い取りました！』

観客は期待に一層盛り上がり、当の鷺野君は、顔を赤くして悔しそうに歯を食いし

ばっている。

『この、生春学園サッカー部のエースストライカー鷺野遼平選手の、一生に一度のロストバージンを皆様に捧げます！』

パッとスポットライトが切り替わり、鷺野君を中心に大きく照らし出す。

鷺野君は、後手に縛られたまま前屈みにさせられて、尻を大きく突き出してアナルを観客に晒す体勢で押さえつけられ、そして、ふたたびターンテーブルがゆっくり回りだして、鷺野君のアナルを観客全員に晒していく。

ちょうど観客の視線の高さにある鷺野君のアナルは、先ほどまでのバイブ責めで、すっかり解れて緩み、パクパクと呼吸に合わせて開閉していた。

そうして一回転して全ての観客に鷺野君のアナルを観賞させると、おもむろに、男子高校生のエラの張った大きな亀頭が、そのアナルに宛がわれた。

「っあ！」

特殊なマイクで拾っているらしい鷺野君の小さな悲鳴が会場に響き渡り、恐怖に身を硬くする様子が手に取るようにわかる。

次の瞬間、男子高校生の亀頭が、一気に鷺野君のアナルに飲み込まれた！

「っああああああっ」

二百人以上の観客の前で、アナルバージ



ンを失った鷺野君の悲鳴が、会場に大きく響き渡った。

男子高校生の巨根はその後も、ゆつくりとだが確実に鷺野君のアナルに挿入されて、ついには根元まで飲み込ませてしまった。

「っんあっ」

そしてさらに、息も絶え絶えの鷺野君の口にも、もう一人の巨根が情け容赦なく押し込まれる。

二人の男子高校生達は、その巨大なペニスを必死に受け止めようとする鷺野君の努力にかまわず、ゆつくりとはあるが、一切遠慮なしに腰をつかってピストン運動をして鷺野君を責め立てていく。

エラの張った大きな亀頭で前立腺を抉られて、勃起したペニスからだから精液を漏らし、長くて太いペニスに口だけでなく喉まで犯されながら、結局、そのまま一時間以上にわたってステージの回転お立ち台でガツガツと犯され続けた。

「つうがあ、がはっんっ！」

ついに最後は、二人合わせて六発目になる精液を流し込まれたところで、咳き込んで鼻から精液を噴出し、開ききったアナルから、ぼたぼたと注ぎ込まれた精液を零しながら気を失って崩れ落ちてしまった。

『引き続いて、先ほどの粗相のお仕置きをいたします。お客様に四発も精液をぶちまけてしまった以上、それ相応の報いを受けさせます』

司会者の声とともに、気を失ってステージを降りていた鷺野君が再びステージに引き出されてくる。

スポットライトの中で彼は、今度は、パイペットののようなものに、うつ伏せで尻を突き出すような体勢で拘束されていた。

ただ、『ベッド』の寝台にはマットもシートも無く、中心に向かって傾斜のついた鉄板で覆われ、中心には排水溝のようなものがついている。

また、低い位置になるため、後方の観客にもよく見えるようにだろう、『ベッド』自体にある程度傾斜がつけられていて、やはりターニングテーブルの上でゆつくりと回わされはじめた。

今までと違い、仕掛の意味が不明なため、観客席もいまいち盛り上がらない。

『それでは、お仕置きを手伝ってもらおう少年達に登場してもらいましょう』

いったん落ちた照明が再び灯り、ステージ全体がライトアップされた。

そして、全裸にビブスとシューズ、ソックス以外は身につけていない半裸のサッカ―少年達が総勢二十人、ステージに駆け上

がってきた。

先ほど幕間で、大胆でエロいダンスを披露してくれた男の子達だ。

全員が完全勃起させたペニスを堂々と晒して胸を張っている。

『先ほどの、お客さまの頭上に精液をぶちまけるといふ失態の償いとして、自らも他人の精液をじっくり味わってもらいます。また、あわせて、先ほどのセックスで腹の中に残っている精液も洗い流してやろうと思います』

司会者の言葉と同時に、給水サーバーのような、透明なタンクがステージに上げられた。良く見ると、コンプレッサーのような機械と、そこから伸びた三センチくらいの太さの透明なホースが付属している。

『このタンクに、これから絞りたての新鮮なスペシャルジュースを用意します』

そして、少年達の一人が、巨大な漏斗のようなものを持ってきた。あの青河君だ。

彼は、その巨大な漏斗を透明なタンクの上部にセットすると、なんとそのまま、その漏斗に向けてチンポを抜き始めた。

他の少年達も一斉に自分のチンポを抜き始めている。この時点でようやく、彼らがナニをしているのか、そして鷺野君がナニをされるのかを理解した観客から感嘆の声があがった。



「……、でます！」

清河君が、切ない声を上げて漏斗に向かつて勢い良く大量の精液を射精した。そういえば、先ほどのエロダンスでも射精はさせてもらっていないはずだ。

追いかけるように、他の十九人の少年達も次々と射精をして、漏斗の下の透明なタンクに新鮮な白い精液を貯めていく。

二十人の半裸の少年たちが、それぞれ最低三発づつ、延べ六十回以上射精して、どんどんタンクを満たしていき、会場内に、少年達の精液の匂いが広がっていく。

しかし、いくら若くて量のある精液といつても、五リットルはあるタンクの容量を満たすのはさすがに難しく、二十人の少年達は、ステージ上で話し合いを始めた。

そして、少年達の中から、またもや清河君が、いかにも困った顔で、頭を掻きながら進み出て来る。

気の優しい彼は、どうやら、二十人の中では一番立場が弱いようだ。

今までで一番恥ずかしそうな顔をしながら、清河君は四回射精してさすがに萎えているペニスを再び漏斗に向けた。

「……、ごめんね！」

そう呟くと、彼のペニスの鈴口から、薄い黄色の液体が勢い良く噴出する。

観客からは納得の歓声上がる。

その歓声を聞いて、清河君はますます顔を赤くしていく。

スポットライトを浴びて、二百人以上の観客に注視されながらの放尿など、そう経験できるものではない。

そのプレッシャーのためかどうかは不明だが、清河君の放尿は思いのほか短時間で終わり、いかにも量が足りなかった。

それを見て、他の少年達の中から二人の少年が笑いながら歩み出て、清河君の肩を抱きながら自らのペニスを漏斗に向ける。

そして、何かを清河君の耳元で囁いてから、二人ほぼ同時に放尿を始めた。

こうして、ついに二十人のサッカー少年達による新鮮なスペシャルジュースがタンクにたっぷりと用意されたが、それを『味わう』ことになる鷺野君は、目を白黒させて、青い顔で狼狽していた。

どうやら、事前には聞かされていないか、あるいは聞いていた話と違うのだろう。

かといって、いまさら抗議できる状況でも無く、すぐに、ただ絶望的な表情でうな垂れてしまった。

対照的に明るく楽しげなサッカー少年達は、照れ笑いをしながら観客に手を振ってステージを降り、入れ替わりに、黒ずくめの男が一人、ステージに上がった。

その手には、皮紐に金属の輪がついた器

具を持っていて、手際よく鷺野君の突き出された尻に装着すると、『スペシャルジュース』が詰まったタンクから伸びた透明ホースをそこに通し、鷺野君のアナルに差し込んでしっかりと固定してしまった。

ホースを挿入された鷺野君は、唇を噛んで、必死に恐怖と屈辱に耐えている。

『それでは、皆さんのカウントダウンで、鷺野選手の腹に、ザーメンと尿のスペシャルジュースをぶち込みたいと思います！はい、十っ、九っ、八っ、七っ、……』

会場の観客全員が、司会者の声にあわせてカウントダウンしていく。

『三っ、二っ、一っ、ゴウっ！』

合図と同時に、コンプレッサーが唸りを上げて起動し、白濁した黄色い液体が鷺野君のアナルに一気に流れ込む！


「ひゃああっ！」

鷺野君は言葉にならない悲鳴をあげて悶絶し、膨れ上がった下腹は直ぐに満杯になって、逆流した液体がアナルから大量に噴出して観客を喜ばせた。

この後も、さらに苛烈な責めが続けられました。これ以上の紹介は自粛します。

来週以降、残りの五人も順次、同等以上の拷問を受けるそうなので、興味のある方は箭アーツ事務局までどうぞ！





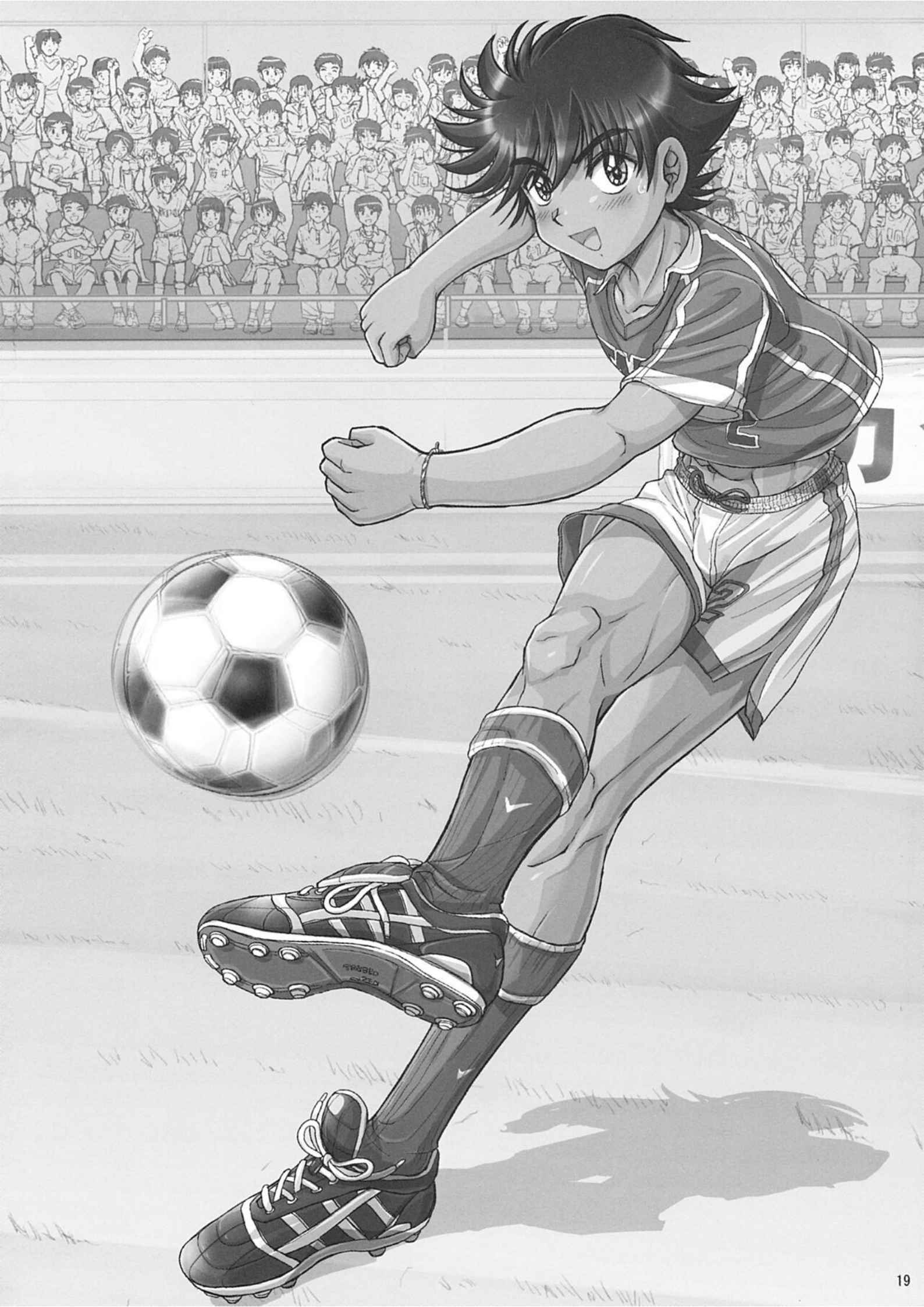
はじめまして、青河ユウ です。  
生春学園サッカー部の1年生で、  
まだ補欠です。

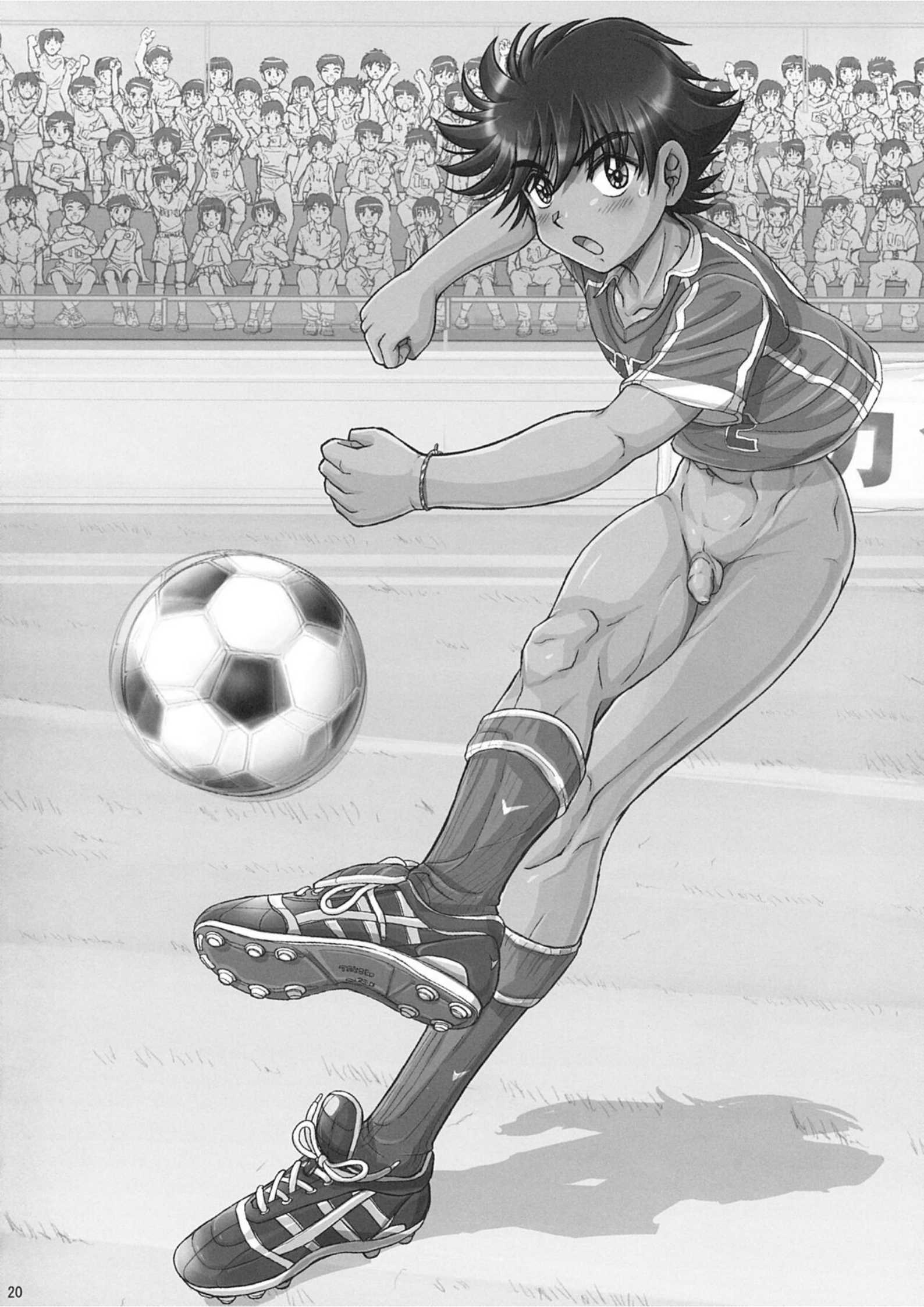
このページの次のページからは、  
元の本である「Rookies Festival」  
の絵のバージョン違いや、  
この本の絵のバージョン違い、  
そしてコピー本の絵の大幅加筆修正版が、  
メインになります。  
(一応、完全新作もあります)

そのお詫びに、

**僕の体を好きに使ってください！**

…って、言えっていわれました…。









筍カツ























相変わらずの不景気の中 皆様お元気でしょうか？  
不況の大波で溺れそうな イラスト担当の筍屋です(´\_`)  
とりあえず この本をお手に取って頂き有難うございました m(\_ \_)m

今回の本は ちょっとワケあり物件として  
2008年5月に発行致しました「Rookies Festival」の補完本となっております(´\_`)  
「Rookies Festival」発行時の某イベントで 大変厳しい内容規制が行われまして  
SM拘束 体格差大なカラミなど 筍屋が得意？とする表現が禁止となり  
規制に沿った関係で 大変不本意な本となりました(´\_`)  
そのため 収録イラストの一部をSM化した絵を中心とした補完コピー本を  
別のイベント用に作成したんですが その時追加/加筆で描いたイラストが宙に浮いた状態で  
このままでは 成仏出来ないと言うことで(´\_`)  
今回 補完コピー本絵に大幅加筆して「リベンジ版」として発行する運びとなりました 南無～  
その様な経過のため この本に収録されたイラストの一部は  
元本「Rookies Festival」のバージョン違いとなっております  
前作を御購入頂いた皆様には 大変申し訳ない限りです ごめんなさい m(\_ \_)m

結果 この本は逆にSM表現に特化した感じとなりました(´\_`)  
最近 ゲームやイラストの表現規制等の話がチラホラ聞こえてきます  
今回の様な内容の本も いつ出せなくなるか判りませんので  
中途半端な形で申し訳ございませんが 何卒御理解の程宜しくお願いします m(\_ \_)m

2009年 6月 筍屋  
筍屋 takenokoya@yahoo.co.jp  
竹藪館 <http://www.hi-ho.ne.jp/su-oh/keikoku.htm>  
(御意見 御感想ありましたら宜しくお願いします)

はじめまして&おひさしぶりです。へたれ文字書きのた～んけーです m(\_ \_)m

この本の成り立ちについては、上記のとおりです。  
もう、僕が書くことは残ってません(´\_`)

この本の男の子たちは、理不尽な状況から予定外に生まれた子たちですが、  
だからこそでしょうか、とても生命力にあふれている気がします。  
ですから、そのうちどこかで、またひょっこりと、出てくるかもしれません。  
その時は、ぜひまた、かわいがってあげてください(性的)

どこか一場面でも、皆さんの琴線に触れられたら幸いです。

2009年 6月 た～んけー  
turn\_k\_vf@yahoo.co.jp

補完計画 Rookies Festival Revenge

2009年6月27日 初版発行  
発行/筍御飯&ふあいふあむ  
著者/筍屋&た～んけー  
印刷所/株式会社 プロス  
連絡先/turn\_k\_vf@yahoo.co.jp



June 2009



苟御飯&ぶあいふあむ